

鴨長明

季は	地は	ワキ	都の人
		ワキヅレ	同行者
三月	山城	シテ	鴨長明
		子方	長明侍童

「是は下京辺の者にて候。さても我春になり候へば。

同じ心の友を誘ひ。こゝかしこの花をながめ。さながら山野に日を暮し候。けふは又醍醐日野山の花をも一見せばやと存じ候。

道行
「春ごとに。見れども飽かぬ桜花。く。年にや花の咲きまさる。心を花に尽しつゝ。いく山々をながめ来て。こゝぞ名に負ふ醍醐なる。日野の外山に着きにけり。く。

詞
「急ぎ候ふ程に。是は早日野の外山に着きて候。暫く此処にて休まうするにて候。

ワキヅレ
「如何に申し候。あれに小さき庵の見えて候。是は承り及びたる長明の方丈の室なるべし。あれへ御出で有つて御休みあれかしと存じ候。

ワキ
「げには是は尤にて候。さあらば皆々かう渡り候へ。某案内を申さうするにて候。

シテサシ
「それ行く川の流れは絶えずして。しかも本の水に

はあらず。淀みに浮ぶうたかたは。且つ消え且つ
結びて。久しくとまる事なし。世上の無常は水の
上の泡。朝顔の露に異ならず。あら定めなの境界
やな。

ワキ詞
「如何に此屋の内へ案内申し候はん。

ツレ 「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ 「是は下京辺の者にて候。花見の為めに参りて候。
暫く庵室を御借し有つて給はり候へ。

ツレ 「あるじに其由申し候べし。如何に申し候。下京辺
の人々にて候ふが。此処へ花見に御出で候。暫く
庵室を借り申したきとの事にて候。

シテ 「安き程の御事なれども。僅の方丈にて候へば。御
休みあるべき処もなく候ふ由申し候へ。

ツレ 「あるじに其由申して候へば。僅の方丈にて候ふ程
に。御休みあるべき処もなきよし申され候。

ワキ 「仰せはさる事なれども。伝へ聞く毘耶離城の。維

摩居士の方丈には。三万二千の獅子の座を。入れ
しためしもあるものを。

シテ「あふそれは維摩の神通力。我はもとより世を捨
人。

ワキ「ひそかに通ずる円覚の。大千界とも。

シテ「いひつべし。

地「因にいたる不二の門。く。押しあけて都人。こ
なたへ入らせ給へや。しかも処は醍醐寺や。外山

の霞立ちつゞく。尾上の桜春風に。散れば雪かと
怪しまる。是ぞ誠に古への。天女散華と御覽ぜよ。

く。

ワキ「御志ありがたう候。げに此処は人跡稀にして。世
を捨人の住所には日本一の処にて候。さていつの頃
より此処に御入り候ぞ。御身の越し方をも御物語
あつて御聞かせ候へ。

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。我はもと鴨の

里の者なりしが。四十あまりが其間に。火風地震の災難を見て。世上の無常を悟りぬ。則ち五十の春を迎へて。家を出で世を背けり。もとより妻子なれば捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらねば。何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲にいくばくの春秋をば経ぬれども。こゝも都近ければ。六十の露の消えがたに。末葉のやどりを結びしなり。

ワキ
「謂れを聞けば不思議やな。さて／＼音に聞えつる。

火風地震の災難を。委しく語りおはしませ。

シテ
「い／＼さらば語らんと。遠山鳥のしだれ尾の。

ワキ
「永き日あかず。

シテ
「語りけり。

クリ地
「抑安元三年。四月下の八日。風はげしく吹きて静ならざりし夜。都の辰巳より火出で来りて。乾の方に燃えたりける。

サシ
「それより朱雀門大極殿。

地
「大学寮民部の省まで移り来て。一夜が程に灰となる。

シテ
「火元は樋口富の小路とかや。病人を宿せる仮屋より出でゝ。吹きまよふ風にとかく移り行く程に。扇を広げたる如く。末広になり。七珍万宝さながら灰燼となりにき。

シテ
「又治承四年の頃。中の御門京極の程より。

地
「大なる辻風起りて。六条わたりまでいかめしく吹きける事の候ひき。三四町をかけて吹きまくる間に。

シテ
「其中に籠れる家ども。

地
「大きも小さきも。破れぬはなし。

クセ
「又同じ年の水無月。俄に都移りありて。帝を始奉り。大臣公卿ことぐく。移り給へば世をふる人。誰かは一人残らん。軒を争ふ住居も。日を経つゝ

荒れ行けば。家はこぼたれ淀川に。浮べばあとは

目の前に。畠となるぞ悲しき。人の心も改まり。

馬鞍をのみ重んじ。牛車をば用ひず。其頃事の便

がありて。津の国に行き見るに。其地せばくて条

里足らず。北は山南は海に近くて。波の音汐風殊

に烈しく。内裏は山の中なれば。木の丸殿もかく

やらん。猶も空しき地は多く。造れる家は少なし。

都の条里あらたまり。唯鄙人に異ならず。人の心

も治まらず。民の愁へも多ければ。同じ年の冬。

猶この京に立ち帰り。さて又養和の頃。二年あま
り飢渴して。浅ましき事多かりき。それさへある
に明くる年。あまさへ疾打ち添ひて。世の人飢へ
かつえ。築地路頭に倒れ伏しぬ。

シテ
「仁和寺の隆暁は。

地
「是を悲しみ。あまたの聖と共に。其死首に。阿
の字を書きて縁を結び。卯月五月の両月に。洛

中にあらゆる。死骸を数へたりければ。すべて四万二千三百余。その外洛外。諸国七道数知らず。其後元暦二年に大なるふる。其様つねならず。山崩れ川を埋み。海傾きて陸を浸し。土さけて水わき。巖も割れて谷に入る。道行く人も倒れ伏し。在家は言ふに及ばず。堂舎仏閣崩れたり。其音百千の雷に異ならず。凄ましかりし有様は。中々詞にも。譬へん方もなかりけり。

シテ「余りの長物語に草臥れて候。各も御休み候へ。

ワキ「仰せ尤にて候。折節是に酒の候。一つ聞し召され候へ。やがて少人御酌に御立ち候へ。

子方「心得申し候。さらば御酌に参らうするにて候。

ワキ「かやうの物語を承り候へば。人は身後の名あらんより。生前一盃の酒には如かずとこそ存じ候へ。

シテ「げにく是は理りなり。かの盧山の惠遠禪師は。禁足にて虎渓に籠りしに。陶淵明陸修靜。樽をい

だきて虎渓に行く。飲酒は仏の戒めなれども。志を感ぜざらんは。鬼畜には劣るべし。いざく酒を飲まんとて。

地「昔の友に鸚鵡盃。くの。醉に誤り虎渓を出で。其酒は濁醪なり。今この酒は珍しき。光さしそふ盃を。持ちながらいざや勧めんと。少人酌に立ち。千たび廻るや春の日の。

子方「長閑けき空に降る雪は。

地「風に乱るゝ山桜。

ワキ詞

「給べ醉ひて候。少人一さし御舞ひ候へ。

地「風に乱るゝ山桜。(舞)

地「かくて酒宴も時移れば。く。弥生の永き。日も西山に傾きければ。住家は淨名の跡をけがせども。たもつ処は周梨槃特が。行にも及ばずと。不請の念佛唱へ給へば。人々今は。暇申して立ち帰れば。長明暫し見送り給ひ。さらばといひて。空をなが

めて月影は。入る山の端もつらかりき。絶えぬ光
りを見るよしもがなと。又庵室にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈第三輯」大和田建樹著